

第四幕

登場人物…

ロビン

マルレーン

ママ

パパ

台所から大きなネズの木が見える家。

窓の外で鳥がぴちち、と長閑に鳴いている。

この幕では時々バックでランダムに鳥の鳴き声を挿入。

基本BGMに紛れる背景的扱いだが、

ト書きに記載されている場面では少し大きめに。

大きな箱の中からママがリンゴを取り出し、

マルレーンに手渡す。

ママ 「はい、今日のおやつ」

マルレーン 「わあい、リンゴお」

口をいっぱいに開けてかぶりつく、可愛い音。

マルレーン 「うふふ、美味し」

ママ 「あんたは本当に可愛い子」

愛おしそうにマルレーンの頭を撫でる。

しゃくしゃくとリンゴを食べていたマルレーンが

不意に動きを止めてママを見上げる。

マルレーン 「ねえ、ママ」

ママ 「何？」

マルレーン 「後でロビンお兄ちゃんも、リンゴ食べて良いよね？」

内心で舌打ちするママ、白々しく。

ママ 「あら、ロビンはリンゴは嫌いじゃなかったかしら」

少し考え込むマルレーン。

マルレーン 「ん……そんな事、ないと思う。」

だって、『良いな』って言ったもん」

回想に繋ぐため、二行目は余韻を持たせた口調で。

く回想く

回想中は鳥の鳴き声オフ。

回想前と同じようにマルレーンがリンゴを頬張っている。

それを羨ましそうに見ているロビン。

マルレーン 「んん？」

ロビン 「……良いな」

マルレーン 「お兄ちゃんも食べる？」

齧りかけのリンゴを差し出すマルレーン。

慌てて首を振り目を逸らすロビン。

ロビン 「べ、別に、いらない」

マルレーン 「どうして？」

ロビン 「……お前のおやつを奪^とったら、ママに怒られる」

きよとんとするマルレーン。

マルレーン 「奪^とるんじゃないよ？ マルレーンがあげるのに」

本音では欲しいが、我慢して。

少し未練を滲ませながらも拒否。

ロビン 「っ、それでも、駄目なものは駄目！」

マルレーン 「変なお兄ちゃん……」

(ずっとリンゴ見てたのに。

マルレーンの、気のせい?)

く回想・了く

以降再び鳥の鳴き声オン。

話を聞いて考え込むママ。

邪魔なロビンを殺してしまう方法が頭の中で閃く。

マルレーン 「ママ……ママ？」

妄想の世界からカムバックして。

マルレーン 「どうしたの、ママ？」

ママ 「あ……、あら、何だったかしら」

マルレーン 「だからね、ロビンお兄ちゃんにも

リンゴをあげて欲しいなって。

そしたらマルレーンも嬉しいなって」

この『だからね』は『だーかーらー！』ではなく、
こういう理由（回想の内容）『だから』リンゴをく
というニュアンスで、お願い風に。

ママ 「ええ、分かったわ。

ロビンが帰ってきたら、そうしましょう」

二行目は黒く、優しいな声でなおかつどす黒く。

可愛い娘と接する際の優しさ、

プラス邪魔者を始末できる事への愉悦。（↑重要）

マルレーン 「わあい、ありがと、ママ！」

ママ 「それじゃあ、マルレーン。

あんたはお茶にしましょう、こっちへいらっしやい」

マルレーン 「はあい」

ぱたぱた、駆け寄るマルレーンと一緒にキッチンへ。

ママ 「バレリアン、ラベンダーにマジヨラム」

全て催眠作用のあるハーブの名前。

魔法を唱えるような口調で列举していく。

これからハーブティーでマルレーンを眠らせるつもり。

マルレーン 「？」

ママ 「あんたは本当、可愛い子」

『ロビンを殺す良いアイデアを与えてくれてありがとう
と心の中で付け加えるくらいの気持ちで。

ママの無意識では『良い子』＝都合の良い子でもある。

（場面転換）

場面転換後も鳥の鳴き声オン。

先の場面から少し時間が経過しているため、鳥の種類Ⅱ鳴き声のパターンを変更。

第三幕で帰宅を促されたロビンが家に帰ってくる。

ママの顔を窺うように恐々とした様子で。

ロビン

「ただいま……」

ママ

「お帰り、ロビン。遅かったわね。」

ロビン

「マルレーンは待ちくたびれてお昼寝中よ」

ママ

「ママ。その……」

デイッシュとスプーンの事を言い出せずまごつくロビン。

ママ

「どうしたの？ 早く入ってらっしゃいな」

出迎えるように戸口の方へ歩み寄るママ。

普段はそんな事はしないので、ロビンは更に戸惑う。

ロビン

「……お皿と、お匙。見付からなくて」

ママ

「まあ、そんな事気にしてたの？」

「良いのよ、今朝は酷い事を言っでごめんね」

猫撫で声のママ、不審そうに顔を窺うロビン。

ロビン

「ママ……？」

ママ

「それよりも、お腹が空いたんじゃない？」

ロビン

「う、うん」

ママ

「よく熟れたリンゴがあるわよ」

ロビン

「え、食べて良いの？」

ママ

「駄目だったら言わないわよ。なあに、いらなの？」

ロビン

「ううん、欲しい！」

ママ

「なら、その箱に入ってるわ。」

「自分で好きなものをお取りなさい」

人が一人くらい入りそうな大きな木箱を指差す。

小走りに駆け寄り箱を開けるロビン。

蓋を開けた瞬間リンゴの香りが漂う。

ロビン 「わあ、良い香り……。本当に、どれでも良いの？」

ママ 「勿論よ」

ロビン 「えっと、それじゃあ……。どれにしようかな。」

皆、綺麗で美味しそうだし。大きいのが良いな。

んつと……」

ごそごそ、リングに手を伸ばそうと箱に頭を突っ込む。

以下、ママの心の声とロビンの独り言を重ねながら、

ロビンの動きを実況するように。

ママ 「(そうよ、もっと箱に首を突っ込みなさい。

頭がすっぽり入ってしまうくらい。

ふふ、リングなんか欲しがるからいけないの。

あんたは今から、

このリング箱の蓋で首を切り落とされるのよ)」

ロビン 「これかな。あ、こっちのすぐおつきい！」

リングを一つ手に取って頭を上げようとするロビン。

慌ててロビンを箱の中に戻そうと唆すママ。そそのか

ママ 「(嗚呼、出てくるのが早いでしょ！)

それはまだ少し青くないかしら？

奥にもっとよく熟れたのがあったはずよ」

ロビン 「本当？ んー、どれだろ……。

へくんくん、と匂いを嗅いで……あ、これ。

凄く甘い匂いがする」

予めロビンにリングを探す演技を長めに演じてもらい、

尺に合わせて編集で微調整できるようにしておく事。

もしくはママの演技をモノローグを先に収録し、

ロビンがそれを聴きながら尺を合わせる事。

ママ 「(……!! 今よ!!)」

すかさずロビンの背後に近付き蓋に手をかけるママ。

ロビン 「うん！ これが良」

ばたん！

ママが思い切り箱の蓋を閉め、ロビンの首が挟まる。

ロビン 「っ……!？」

蓋の縁で首が切断される一瞬の断末魔が

蓋が閉じる音の後ろでほんの微かに聞こえる。

全く何が起こったか解らぬまま事切れるロビン。

ギロチンのように切断された首が箱の中へ転がり落ちる。

ごっとな、箱の中でくぐもった音。

更にロビンの体が床に倒れる音、そして静寂。

余韻を持たせて、沈黙の尺は少し長めに取る。

窓の外では鳥がぴちち、と他所事のように鳴いている。

ママ 「……ロビン？」

沈黙。

恐る恐る、震える声で。

ママ 「返事がないわ。ええ、ええ、そりゃそうよね。

今あたしの目の前に倒れてるのは、首なし死体。

あの子の頭はリング箱の中……」

徐々に殺したという実感が歓喜となって湧いてくる。

ママ 「……ふ、うふふ、あはははは。馬鹿な子！

何てお馬鹿さんなの！ こんなに上手くいくなんて。

あぁつと、声が大きいわ。

マルレーンが起きてしまう」

声のトーンを落としリング箱を開ける。

ママ 「さあ、どうしようかしら。

流石にマルレーンやあの人には

私が殺したと言う訳にはいかないし。

……そうね、こうしましょう」

〈場面転換〉

更に時間が経過し、鳥の泣き声オフ。

マルレーンが目をこすりながら子供部屋から出てくる。

マルレーン 「ふああ、ママあ？ あ、ロビンお兄ちゃん！」

ロビンが食卓に座っているのを見て嬉しそうに駆け寄る。

ロビンの首には包帯が巻かれ、胴体と頭を繋いでいる。

マルレーン 「お帰り、お兄ちゃん。お腹空いてない？」

ママがリングゴ食べて良いって……お兄ちゃん？

お寝んねしてるの？ それならベッドに……」

反応がないのを訝しみゆさゆさと袖を掴んで揺さ振る。

するとロビンの首に巻いてあった包帯が解け、

ロビンの頭が床に落ちる、ごっとな。

マルレーン 「ひっ……え、う、あ……」

ごろごろ転がるロビンの頭と、倒れ掛かってくる体。

一気にパニックになって火が点いたように泣き出す。

マルレーン 「う、ああああん、うわあああん、ママ、ママーツ！」

ママ 「どうしたの、マルレーン！」

台所の奥から待ち構えていたように飛び出してくるママ。

マルレーン 「お、お兄ちゃんの、頭が、っ、頭が……」

うえええん、おち、落ちちゃったあ！」

ママ 「嗚呼！ それは怖かったわね。」

大丈夫よ、ママがいるから大丈夫」

泣きじゃくるマルレーンを抱き締めてあやすママ。

自分のした事が受け入れられずがたがた震えて。

マルレーン 「どうしよう、お兄ちゃん、死んじゃった……？」

マルレーンが殺したの？」

ママ 「あんたは悪くないわ。泣かないで。」

ロビンの事はママが何とかしてあげる」

マルレーン 「ほんと……？」

マルレーンはママがロビンを治してくれるかも、

という期待を抱くくらいには幼くて純粹。

涙をいっぱい溜めて継るような目でママを見上げる。

ママ 「ええ、だからここはママに任せて。

でも、一つだけ約束をしてちょうだい」

マルレーン 「何、ママ？」

ママ 「今からママがする事は誰にも内緒。

二人だけの秘密よ、良い？」

マルレーン 「うん、約束する……。」

だから、ロビンお兄ちゃんを……（助けて）」

『助けて』の部分はママには聞こえない心の声。

く場面転換く

夜になり再び鳥の鳴き声オン、梟の鳴き声がほうほう。

パパが仕事から帰ってきた後、食卓にて。

ママがシチューの皿を運んできてパパの前に置く。

ママ 「はい、あなた。今日のシチューは特別製よ」

パパ 「おお、良い匂いじゃないか。

何かスパイスでも使ったのかい」

ママ 「それは秘密」

一口すくって口に運ぶ。

パパ 「うん、美味しい！ こりや絶品だ」

ママ 「良かった、あなたのお口に合って」

美味しそうに手を止めず話すパパ。

パパ 「そういえば、子供達はどうした？」

二人とも寝てしまったのかい」

ママ 「ええ、もうすっかりおねむで」

子供の顔を見る事ができず少し残念そうなパパ。

パパ 「そうか。いや、寝る子は育つ、良い事だ」

こっそり起きて食卓の下にもぐり込んでいたマルレーン。

泣き声を殺しながら、食卓の下に散らばっている

ロビンの骨を拾い集めている。

ここからはマルレーンに視点を合わせる。

パパとママの会話は少し遠く、卓一枚隔てている風に。

マルレーン 「ロビンお兄ちゃん、ごめんなさい。」

でもね、でもね、内緒だから言えないの」

パパ 「それにしても、これは何の肉だい？」

鳥かな、いや鳥にしては大きいな」

ママ 「そうね、鳥でも間違いではないかしら」

パパ 「は、何だいそれは。おかしい動物だな」

マルレーン 「♪My father is eating

my brother,
アイシットアンダーザテーブル
I sit under the table,
ピッキングアップベリーゼム
Picking up berry them……」

『My Mother Has Killed Me』の歌の主語を変えたもの。

小さな声で呟きながら、段々歌詞に違和感を覚え始める。

以下パパとママの台詞は→のマルレーンの歌にかぶる。

パパ 「おや、テーブルの下に何かあるぞ？」

ママ 「あら、気の所為よ」

パパ 「いやいや、お前は案外そそっかしいから。

ほうき 箒で何かを掃き込んだのかもしれないぞ」

マルレーン 「この歌、何だっけ。何かが違う」

ここからマルレーンの歌詞が正しいものになる。

それと同時に、マルレーンの声にロビンの声が重なる。

演出的なものなのでキャラクターには聞こえていない。

マルレーンについては本当の歌詞をロビンに

つられて口をしているような風味があってもよし。

ここだけしんと、周囲の音が消える。

ロビンは恨み、悲しみが滲む声音にエコーを加えて。

兄妹

「♪My father is eating me,
マイファースターイズイーターディングミー
My sister sits under the
マイシスターシットアンダーザ
table, picking up berry
テーブルピッキングアップベリー

ゼム アンダーザ コールド
 the under the cold
 marble stones」

←の会話は直前のパパとママの会話と続けて収録する事。

ママ 「ご飯中によしてちょうだいな」

パパ 「うん？ 何だか大きいぞ、猫でもいるんじゃないか」

ママ 「あなた！」

マルレーンに気付きテーブルクロスを捲り上げるパパ。

兄妹 「♪ My mother has killed me」

びたり、歌が止まる。

食卓の下を覗き込んだパパ。

目を腫らしたマルレーンと目が合って固まる。

マルレーンの手の中にはロビンの骨。

ママは険しい表情で黙り込む。

重い空気の中、戸惑いながらパパが口を開く。

パパ 「マルレーン、そこで何をしてるんだい？」

マルレーンは沈黙、ロビンだけが歌詞を繰り返す。

マルレーン 「……」

ロビン 「♪ My mother has killed me」

つられるように、マルレーンも次の歌詞を口にする。

兄妹 「♪ My father is eating me」

パパ 「……マルレーン？」

呆気にとられるパパ。

事情がバレたかどうかはリスナーには有耶無耶のまま。

解説..

『My Mother Has Killed Me』という歌にちなむ。

ただし、ここから後の展開はこの歌の元となった

グリム童話の『ネズの木』にストーリーを寄せるため、

歌とは異なる筋書きになる。